「鯱っ子学習」第６学年実践記録①

報告者　立石　耕一

Ⅰ　本実践の目的

昨年度の５年時の個人研究（以下、鯱っ子学習）と今年度の鯱っ子学習を比較して、本学級の児童（6年１組 35 名）は下記のような変容を感じ取っている（【　】は言語能力とその育成方法から）。

①文章が短くなって読みやすかったり、分かりやすく画像などを入れたりした。【明確化】【視覚化】
②前は自分の意見を優先していたけれど、自分の意見と事実でまとめることができた。【モニターする】
③きっかけや見通しをしっかりと持つことができた。【原因結果】
④いる情報といらない情報を取捨選択することができた。【選択する】
⑤昨年は、分かりやすさよりもデザインに目を向けていたけど、今回の鯱っ子学習は分かりやすさにも目を向けて作ることができた。【評価する】【社会言語能力】
⑥昨年は、インターネットで調べたことをそのまま載せていたけど、６年生になって、自分で実験をしたり、アンケートをとったりして、自分で調査してまとめることができた。【方略的能力】
⑦聞き手がくれた改善点を素直に受け止めた。【評価する】【談話能力】
⑧画面だけでなく、見ている人たちの方を時々みながら話すことができた。【談話能力】

上記の①～⑧の変容は、多くの児童で共通の部分でもある。この変容の実感と今年度の取り組みがどのように関わりがあるのか、本稿で整理をしていく。

昨年度の第５学年の研究の課題として、以下のようなものがある。

更に成果を高めるために「鯱っ子学習」で身に付き、発揮される各教科で学んだ力の整理を行い、その育成のために効果的な手立ての洗い出しを「課題の設定」「情報の収集」「整理・分析」「まとめ・表現」の学習過程に対応させながら明らかにしていく必要がある。

昨年度の研究の成果から、「児童自身は各教科での興味・関心に基づく課題を設定し、各教科で学んだ力を生かしながら探究する姿が見られた」とある。課題と比較すると、興味・関心を持って取り組むことにとどまらず、「どのような力」を発揮したのか意識しながら取り組む必要がある。

そこで、①～⑧を見いだした児童の変容を以下の実践を通して示していく。

個人研究において記述と推敲を意識するために、自分の学びを可視化する「ラーニングマップ」を活用した鯱っ子学習を行う。

１　単元の目標（児童の姿）

ア　抽象的な思考が可能となり、全体を把握した上で注目すべき要素を重点的に抜き出し、頭の中で概念化できる。【読解力の側面】

イ　新たな産物・視点をつくり上げることができる。【創造的思考の側面】

ウ　一般的な状況に応じて、他者に思いや考えを論理的に伝えることができる。【他者とのコミュニケーションの側面】

２　単元の計画（令和４年４月～７月実施）

昨年度と同様の鯱っ子学習の流れの中で、ラーニングマップを活用していく（図１）。

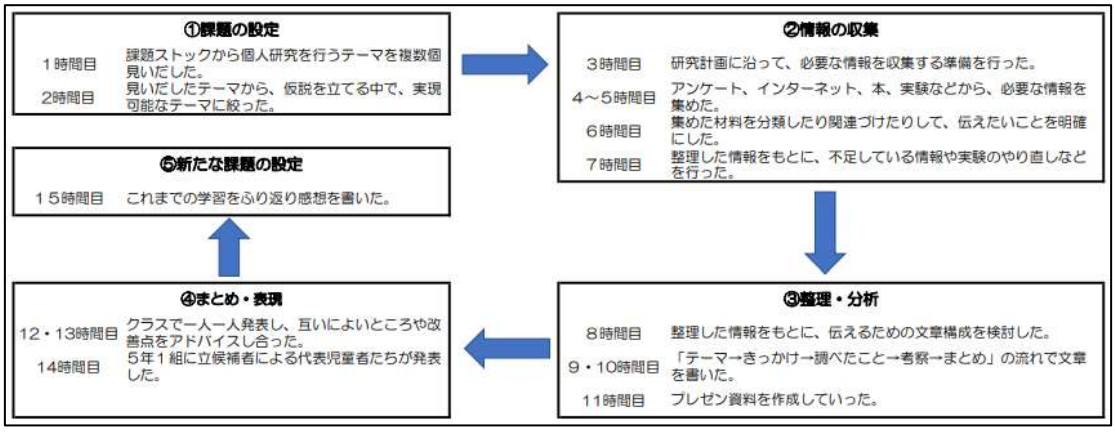

図１　単元の計画

ラーニングマップに関しては、課題の設定の前に、一人ひとりのラーニングマップを作成していくことを伝え、随時、ラーニングマップに追記していくことを確認した（**図２**）。

図２　単元終了時の全児童のラーニングマップ

鯱っ子学習の中での他教科とのつながりをラーニングマップに追記している児童の中で、次の児童の姿に着目する。

㋐　５年時の鯱っ子学習からの質的な変容を実感している。

㋑　ラーニングマップへの追記内容に効果的な「場面」と「有効性」を実感している。

３　抽出児のプロフィール

５年時の鯱っ子学習から、それぞれ異なる困り感を見いだしている児童を３名抽出していく。

表１　抽出児のプロフィール

A児	B児	C児
聞いている人が分かりやすいか。ソフトの使い方が分からないときがある。	紙面に情報を詰め込み過ぎていないか。まとめる力。	グラフや思考ツールを使えるようになりたい。

Ⅱ　「アカデミックライティング」指導における単元の展開と抽出児の様子

１　学習課題設定場面における抽出児の様子

図３は、**A児**の単元終了時のラーニングマップである。課題設定場面では、課題ストックに「夏季五輪と冬季五輪での競技の知名度」「なぜメダルの色は金銀銅なのか」の課題から、前者に絞っている。絞った際の理由は、調査の仕方でインタビューにより結果を得られやすいという見通しからであった。また、５年時からの変容として、「話題（流行）」に目を向けて課題設定できたことを述べている（マップにメディアの情報と追記）。

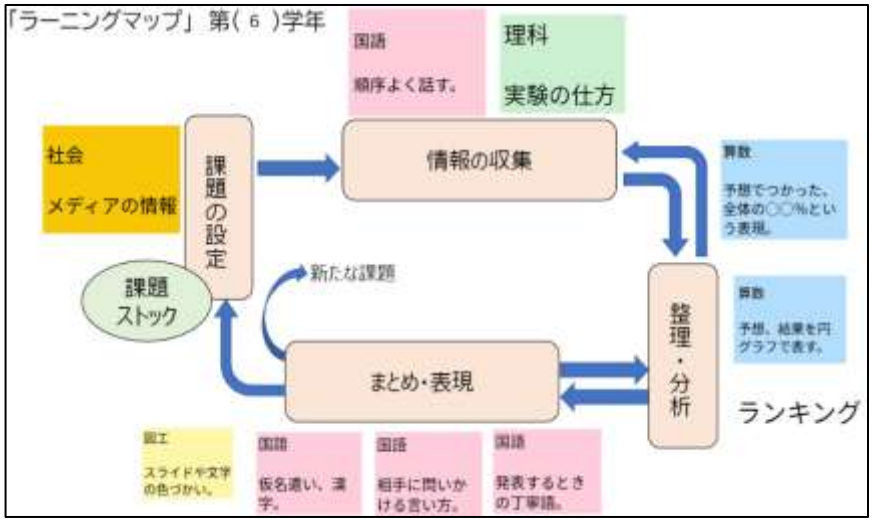

図３　A児のラーニングマップ

図４は、Ｂ児の単元終了後のラーニングマップである。課題設定場面では、課題ストックに「サイコロの目の削られ具合が違う影響」「円周率はなぜ3.14なのか」「円柱の１／３の体積が円錐は本当なのか」の課題から、「サイコロ」に着目している。理由は、認知度である。これは、５年生への発表ということであり、５年生が分かる課題を選択している。変容としても、みんなが知らないことではなく、知っていることを深く調べたと述べている。

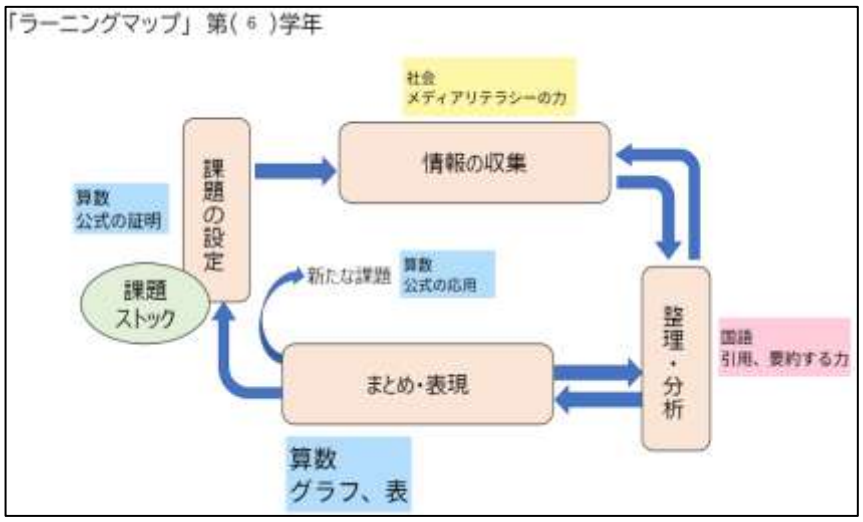

図４　Ｂ児のラーニングマップ

図５は、Ｃ児の単元終了後のラーニングマップである。課題設定場面では、課題ストックに「ユニバーサルデザイン（UD）について」「お金の秘密」「計算の秘密」の課題から、「UD」に絞っている。絞った際の理由は、３年時の特別支援学校との交流から、自分たちが見えていない部分があるのではないかという問いを持ったことと述べている。ラーニングマップには、社会での人のかかわりと追記している。

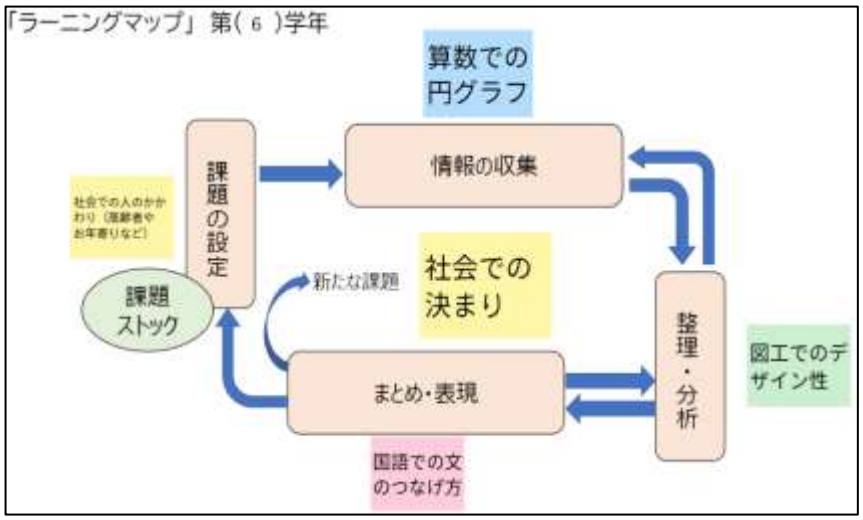

図５　Ｃ児のラーニングマップ

２　情報の収集・整理及び分析場面における抽出児の様子

Ａ児は、ラーニングマップにまとめることで、他教科とのつながりを意識することができたよさを述べている。具体的には、スライドに円グラフを取り入れた際に、算数とのつながりを意識することができたと述べている（図６）。この円グラフの挿入は、５年時には未習であったが、学習したことにより使えるようになったことと、リハーサルの際は、数字だけであったが、再度見直す中で、円グラフにした方が分かりやすいと気付き変更している。また、「順序よく話す」では、ごちゃごちゃ話しても聞き手が分かりにくいためと述べ、国語とのつながりを実感していた（図３）。

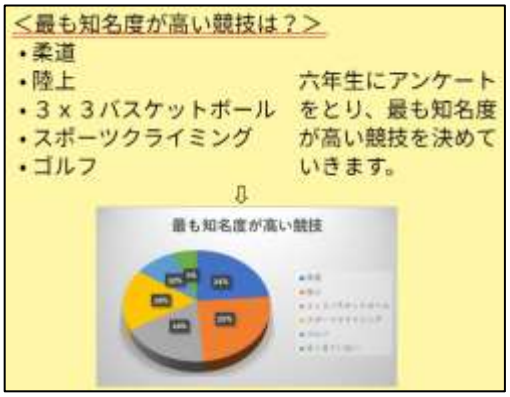

図６　Ａ児の情報の整理

Ｂ児はラーニングマップのよさとして、全体の流れが分かることを述べている。また、情報の収集・整理及び分析場面で、メディアリテラシーの力と追記しているが、サイトによって記載されている内容が違うことを実感し、取捨選択する力の大切さを感じたと述べている。図７はＢ児の実験結果を示す表である。この表はリハーサルでのアドバイスをもとに、大きくしたり、赤を

結果を表す表

	1が出た回数	2が出た回数	3が出た回数	4が出た回数	5が出た回数	6が出た回数
乱数１の回数(回)	18	10	8	25	20	17
乱数２の回数(回)	15	16	18	16	14	18
乱数３の回数(回)	19	17	16	12	15	18
300回出した結果(回)	52	43	42	53	49	53
サイコロ１の回数(回)	28	13	16	20	14	9
サイコロ２の回数(回)	13	24	17	16	11	19
サイコロ３の回数(回)	13	19	17	14	14	23
300回振った結果(回)	54	56	50	50	39	51

図７　Ｂ児の情報の整理

入れたりして、より分かりやすくなる工夫がされている。

Ｃ児は、自分のラーニングマップを見直して、理科の実験での検証のよさを追記したかったが、自分自身、まだ使えていないので追記していないと述べている。また、５年時からの変容として、調べた結果から、すぐに考えを書いていたけれど、理由や分析を踏まえて１段階深く書くことができたと述べている。

図８　Ｃ児の情報の整理

３　まとめ・表現場面における抽出児の様子

Ａ児は、**図３**で図工とのつながりも意識している。具体的には、スライドや文字の色使いについてである。これは、最初は、まとめを全て大切であるということから赤色にしていた。しかし、リハーサルにて、他者からのアドバイスで「さらに大切な部分のみを赤にした方が見やすい」と言われ、修正したことで、自分の中で見やすくなったと実感したことから、ラーニングマップに追記している（**図９**）。

Ｂ児が述べる５年時からの表現力の向上として、イラストや画像の挿入、文字の大きさの工夫を上げていた。さらに、これまでは、一つの話題の中で、急に他の話題を入れていたが、一つの話題を深めていくようにつなげていくようになったと述べている。**図 10** は、**Ｂ児**のまとめである。数学的確率と統計的確率に関しては未習のため、誤差の範囲の扱いは不十分な部分もあるが、現地点でできる分析を述べることができている。

Ｃ児は、ラーニングマップのまとめ・表現の部分で、国語での文のつなげ方と追記している。これは、言葉をつなぐときに、聞き手にどうしたら分かりやすくなるのかを意識した際に気付いたと述べている。また、リハーサルの際に、見出しと本文の違いを出した方がいいというアドバイスをもらい、文字の大きさや書きぶりを修正している（**図 11**）。

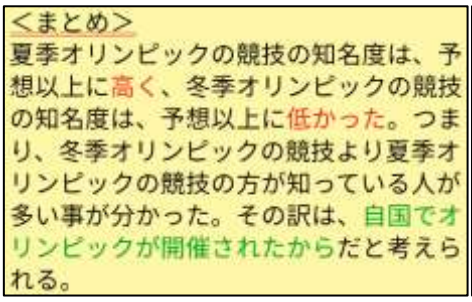

図９　Ａ児のまとめ

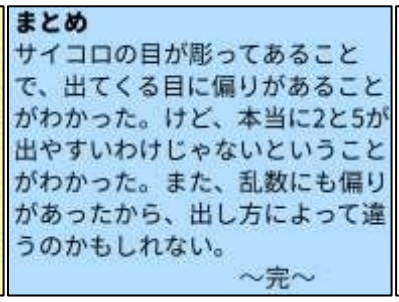

図 10　Ｂ児のまとめ

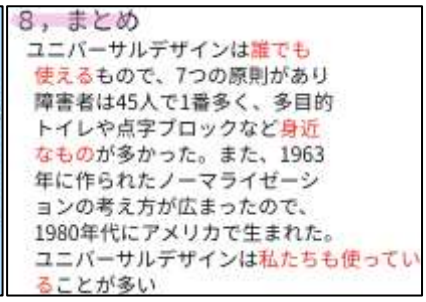

図 11　Ｃ児のまとめ

Ⅲ　実践の整理

図 12 は、５年生に発表した際に、自由記述で５年生が参考になったと感じた部分を整理したものである。「実際の写真を使って説得力を出していた」「アンケート結果からさらに詳しく説明している」「問いかけながら話している」などが参考になったと書いている。これは、発表者全体に対して書かれていることが多く、研究の流れが分かりやすく、聞き手も理解しやすい構成が共通できていたことを示している。

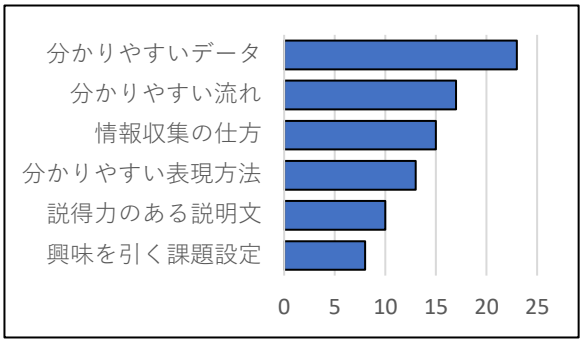

図 12　参考になった点（５年１組 31 名）

以下に、本実践を通しての成果と今後の展望を示す。

１　実践の成果

- 自らの学びの足跡をラーニングマップに追記することで、深いサイクルを生み出していた。
- ラーニングマップを活用することで、研究全体の流れをクラス全体で共有することができ、互いにアドバイスしやすい状況をつくり出すことができた。

２　今後の展望

個から全体のラーニングマップへと整理することで、さらに、ラーニングマップの活用法を探る。